

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第585号 平成25年7月30日

## 日本語への引きこもり

国際政治学者の藤原帰一氏が、「日本語へのひきこもり」という一文を朝日新聞に投稿しています（6月18日付）。

その内容は、概ね次のようなものです。

西欧と肩を並べる国家形成を目指して以来、外国文化の吸収は近代日本の課題だった。旧弊に閉じこもった日本を変えるためには欧米諸国の政治制度やその基礎にある価値観を学ぶ必要があるという自覚が、近代日本の知識人を支えてきた。

外国の言葉を話し、その知識や文化を伝える官僚や知識人等が西欧化の担い手になり、外国語を話さない国民には翻訳を通してその成果が紹介された。

それは、文化の一方的な流入ではあったが、外に目を開くことがなければ日本の変革があり得ないという感覚が多く国民に共有されていた時代でもあった。

私は、高校生の頃から翻訳文化を好きになれなかった。翻訳を通すことなく原語を通して外国の人々と議論し一緒に仕事をするのが当たり前であり、翻訳文化はその状態に変わる前の過渡的な現象に違いないと思っていた。

ところが、翻訳文化とその時代が過ぎ去った今、目の前にあるのは、原語を通し国境を越えて議論を行う空間ではなく、日本語を読み、日本語で考え、翻訳された文章さえもあまり読まない空間だった。

世界中では、英語で構成された空間で活躍する人が増えているのに、日本では、以前よりも日本語の世界に引きこもっている。

藤原氏は、戦後の日本は、高度経済成長を経て、英語を使わなくても豊かな生活を保持出来るという幸せな環境にあるが、しかしそれは、「ものを知り、考え、議論する空間が日本語の世界に縛られるという犠牲と引き換えに得られたもの」であると指摘しています。

また、仕事の現場では外国語を使う人が増えている様に見えるが、それでも、政治や社会を考える時に、「翻訳ではない日本語の文章を読み、他の言語で書かれたものを読まずに考える人々が異様に膨れあがったのは事実」と述べています。

昨今は、若者の留学離れが鮮明になっていますし、外国勤務を嫌う若者が増えているという話も聞きますが、日本人が「日本語の世界に引きこもり」、思考だけでなく行動までも内向きになっているとすれば、日本の将来にとっては憂慮すべき事

す。

また、政治家の発言も、内向きで、グローバルな視点に欠けていると感じる事がありますが、厳しい局面が続く国際社会の中で、内弁慶的な思考や行動では、国を誤る元です。

小学校での英語教育については、指導する教師の力量や支援体制、時間数の不足等の課題もあり、今もなお教育関係者の間には根強い反対の声があります。

また、小学校での英語教育に反対の中には「日本語でさえまともに使いこなせていないのに英語どころではない」という意見があります。ある意味、もっともな事ですが、英語教育を進めるからといって、国語教育をないがしろにして良い訳はなく、むしろ、英語という道具をしっかりと使いこなす為にも、国語力を向上させる必要がある事はいふ迄もありません。

ただ、世界がグローバル化しており、しかもその動きは更に加速する事が予測される中、日本人が「日本語への引きこもり」から抜け出す上でも、小学校からの英語教育は大変大事な取り組みではないかと考えています。従って、今後引き続き、国、地方自治体、学校はじめ教育関係者はしっかり連携し、指導体制の整備や中学校や高等学校との接続等、より効果的な英語教育の方策について検討を進めていただきたいと思っています。(塾頭：吉田 洋一)